２００４年１２月９日（木）

東海の古代

第　６１号　編集・発行　古田史学の会・東海

代表 林 俊彦 〒461-0025 名古屋市東区徳川 1-729
電話/FAX 052(936)5012
郵便振替 00870-5-30752

大阪の横田さんと二人で九州旅行に行ってきました。テーマは「博多湾岸東西横断・草薙剣と伊勢神宮を探して」。数々の成果がありましたが、今後例会等で報告していきます。

伊勢神宮を求めて

一番印象深かったのは、糸島半島にあった二見ケ浦と夫婦岩でした。本家の三重県のものより勇壮な景観でした。もちろん二見ケ浦、夫婦岩の名称自体は後代の付加でしょうが、九州に本来の伊勢神宮を求める発想の正しさを再確認できました。

時に天照大神、倭姫命に誨へて曰はく、「是の神風の伊勢國は、常世の浪の重浪歸する國なり。傍國の可怜し國なり。是の國に居らむと欲ふ」とのたまふ。故、大神の教の随に、其の祠を伊勢國に立てたまふ。因りて齋宮を五十鈴の川上に興つ。是を磯宮と謂ふ。則ち天照大神の始めて天より降ります處なり。（垂仁紀二十五年）

伊勢神宮の位置は日本書紀のこの記述により確定されます。筑紫神話の只中で天照は生まれました。つまり三重県の伊勢ではありえません。「天照大神の始めて天より降ります處」とはイザナギがみそぎをして身体を洗った場所、「筑紫の日向の橘の小戸の阿波岐原」の周辺を探すことになります。博多湾岸のどこかです。

続・二名島はなかった

古事記の島生み神話に登場する大八島問題につき、私見を再整理します。つまり淡道之穂狭別島、伊予之二名島、隠伎之三子島、筑紫島、伊伎島、津島、佐度島、大倭豊秋津島の八島をどう解釈するか、以下に新説をたてます。

最初に「二名」という地名を否定します。思いつきで無い、とするには古事記の表記のルールを新たに見出さなければなりません。

①大八島は倭国の始原の島々である。ちまちました二段地名などあるはずがない。なお古代において、島とは「四面を水域に囲まれた区域」だけを意味しない。「一定範囲の排他的支配を主張している領域」である。現在も特殊な業界の人が実用する用語である。②妙に長く、二段に見える場合は島名の間に語註がはさまれている。つまり、大八島とは、淡道之島、伊予之島、隠伎之島、筑紫島、伊伎島、津島、佐度島、大倭島である。その一部に穂狭別、二名、三子、豊秋津の語註がはさまれている。以上。

こうして伊予之二名島を否定して伊予之島に変更することは、豊秋津島を否定して大倭島を登場させることになります。

豊秋津とはニニギ尊の母親の名にある「万幡豊秋津師」と同様な美称です。大分県の秋津とは何の関係もありません。そして大倭島とは当然あるはずの出雲を指します。九州王朝に先行する出雲王朝の時代に大八島の概念が誕生しました。島名に併記される「亦の名」の古さは古田先生も認めるところです。古事記の大八島こそが古形をよくとどめています。日本書紀の大八州国の様々な変容はその新しさを示します。詳しくは例会にて。

１月例会に参加を

日程：１月９日（日）午後１時～4 時半
場所：名古屋市公会堂第２集会室（２階）
参加費：500 円（維持会員は無料）

今後の予定

２月例会：２月１３日（日）

例会は原則として毎月第２日曜日ですが、会場の都合等により変則的になるばあいがあります。日程をよく確認しお出かけください。また１月は部屋がいつもと違います。２月は通例の第３集会室です。参加費は五百円（維持会員は無料）。古田先生とその学問に興味のある方なら、どなたの参加も歓迎します。

二倍年暦逍遥②

時に舎人有りき。姓は稗田、名は阿禮。年は是れ廿八。人と為り聡明にして、目に度れば口に誦み、耳に拂るれば心に勒しき。即ち、阿禮に勅語して帝皇日継及び先代旧辞を誦み習はしめたまひき。然れども、運移り世異りて、未だ其の事を行ひたまはざりき。（古事記序文）

皆さん何度も目にしたであろう古事記序文の一節ですが、実に奇妙な記述であると気づきました。

古事記にせよ、日本書紀にせよ、歴代の天皇を除き、意外と個人の年齢は記載されていません。それなのに、たかが舎人ごときの年齢がなぜ特記されているのでしょうか。

稗田阿禮の任務はこの序文にあるように「人間テープレコーダー」に徹することではないでしょうか。つまり強烈な記憶力を発揮する作業です。古事記の記述内容の中には難解な部分もありますが、阿禮の仕事自体はそれほど理解力を要求されるものではありません。皆さん、自分自身をふりかえれば、容易に想像できると思いますが、人間の記憶力のピークは十歳台でしょう。中学、高校の時代です。思考力、理解力はその後も成長を続けますが。たとえば古田先生でも 28 歳といえば記憶の能力に限れば(失礼ながら)すでに下り坂を迎えておられたのではないでしょうか。まして古代のことです。奇妙な人材起用です。

なぜ、そんな年齢の阿禮が登用されたのか、これが二倍年暦（つまり 14 歳）ならば妥当性を持ちます。たとえば女性の輝くような美しさ、みずみずしい肌のきらめきなどを描写する時、歳は１８、と添えれば、さもありなんと説得力を増すでしょう。これが阿禮の年齢特記の真相ではないでしょうか。

そんな考えを例会で発表したところ、意外にも不評でした。どうも「帝皇日継・先代旧辞」が「天皇の系図に毛のはえた程度のもの」という認識が皆さんにあったようです。稗田阿禮の仕事はあまり高く評価されていないようです。古田先生も「盗まれた神話」発表の時点ではそう思われたようです。しかしその後、「盗まれた神話」朝日文庫版・補章や、詳しくは「天皇陵を発掘せよ」（三一新書）をご覧になればわかるように先生の説も深化されています。

つまり古事記序文と『尚書』正義序文との対比の問題です。①秦の始皇帝の焚書坑儒によって、多くの典籍が失われた。②ときに、伏生という老人がいた。齢九十歳、暗記力抜群、「文を誦すれば則ち熟す。……其の習誦に因り」多くの典籍を暗誦していた。③漢の孝文帝は、学者たちに命じ、伏生のもとに遣わし、これを記録させた。今にしてその挙を実行しなければ、それらが永遠に失われる、と考えたからである。この「義表」と記序との相似の分析で伏生と稗田阿禮が対比されるならば、阿禮の仕事が「系図に毛のはえたもの」の暗誦にとどまるはずがありません。継体天皇の「焚書刑語」を超えて、阿禮の頭脳が挑んだのは古事記本文の全体やそれを上まわる古伝承の渉猟だったのではないでしょうか。

やはり阿禮の年齢 28 歳は二倍年暦によるものです。なお伏生の年齢九十歳も二倍年暦ではないかという問題も浮上します。今後の課題とします。

寒過（ふゆすぎて）　暖来者（はるきたれば）　年月は　新たなれども　人は旧（ふ）り去く（万葉集一八八四番）

通説では寒をふゆ、暖をはると訓じますが、冬や春は 1 年を四分する考え方です。しかし寒暖は二分法です。二倍年暦では暖かい年と寒い年が繰り返されます。そんな意識の元で作られたうたではないでしょうか。

旧暦で１～3 月を春と呼びますが、皆さん、この「春」の時期に「暖」というイメージをもてるでしょうか。感覚の世界のことであって、もちろん別な感想を持たれる方も多いでしょうが。